

「命を守る」教訓を全国に伝える 殉職した仲間たちに固く誓う



▲全壊した消防署の前で手を合わせる消防長（当時）

写真提供 気仙沼・本吉広域行政事務組合消防本部

2011（平成 23）年 3 月 11 日、想定をはるかに超える巨大な津波は、内陸の奥深くまで押し寄せ、災害対応に当たっていた 9 人の消防職員が殉職した。

この痛ましい出来事は消防職員たちに、「なぜ仲間たちは命を落としたのか」「命の危機が迫る状況下でどう救命活動を行うべきか」という問いをつきつけた。

発災から 7 カ月後に発足した消防職員の津波被災事故検証再発防止委員会で、この経緯が分析される。消防職員は指令を全うしようとする使命感や目の前の地域住民を救おうとする義務感から、自らの身に迫る命の危機を感じにくくなり、撤退が遅れるという傾向があることが確認された。

自分の命があればこそ、人の命を助けることができる。救命活動は、自らの命の安全を確保した上

で行われなければならないことを、消防職員たちは改めて肝に銘じた。この消防職員たちの気づきと決意は、南三陸町から全国に発信され、全国の消防署での救命活動の基本を見つめ直すきっかけとなった。

仲間を失った深い悲しみを胸に、消防職員たちは今もこう訴え続けている。

「災害は時を選ばずにやって来る。そのとき、どうか自分の命を大切にしてほしい。」



▲当時の南三陸消防署は浸水想定エリアの外側に位置していた。

国土地理院撮影写真